



京大広報

号外

2005. 4

目次

〈入学式〉

- 学部入学式における総長のことば……………1902
- 大学院入学式における総長のことば……………1905

〈大学の動き〉

- 平成17年度学部入学式……………1908
- 平成17年度大学院入学式……………1909
- 平成17年度入学者選抜学力試験の結果……………1911
- 名誉教授称号授与式……………1912



平成17年度 入学式

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

入学式

学部入学式における総長のことば

平成 17 年 4 月 7 日

総長 尾 池 和 夫

今年、総合人間学部 123 名、文学部 228 名、教育学部 74 名、法学部 340 名、経済学部 267 名、理学部 312 名、医学部医学科 103 名、医学部保健学科 145 名、薬学部 86 名、工学部 996 名、農学部 318 名、計 2,992 名の方々を、この京都大学の学部を迎えることができました。入学おめでとうございます。ご列席の沢田敏男元総長、長尾 真前総長、名誉教授、副学長、学部長、研究科長、教職員とともに、心からお祝い申し上げます。

合格発表の日に向けて、キャンパスには課外活動を宣伝する歓迎行事があり、合格発表の掲示板の前ではアメリカンフットボールの部員が合格者を胴上げして祝ったり、記念写真をとったり、授業料値上げ反対のデモがあったりと、たいへんにぎわっていました。いずれにしても受験勉強の具体的な成果が、合格という形で祝われるのですから、皆さんそれぞれの喜びもたいへん大きいことと思います。

今日の入学式を迎えられたみなさんの次の目標は、何といってもしっかり勉強して大学を卒業することであろうと思います。受験勉強にかえて、今日からは大学での学習に、あるいは生涯の学習にとりかかっていただきたいと思います。

ご家族の方々も、今までの学習の支援を通して、それぞれの思いを抱いてご列席のことと思います。入学を祝い、また、これからの大学生活を見守ってあげていただきたいと思います。

京都大学には約 3,000 人の教員がいます。また、約 2,300 人の常勤の職員とたくさんの非常勤職員がいて、皆さんの活動を支援します。また、皆さんには約 2 万人の現役の先輩がいます。学問に、課外活動に、ボランティア活動に、地域あるいは世界的規模の行事に、これから参加することになります。入



学された皆さんは、まず京都大学の中と、京都の街や周辺の土地をよく観察してみてください。まだ知らない多様な世界がそこにはあって、皆さんを歓迎してくれることでしょう。京都大学の中の一つの例を紹介しましょう。第29回 ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト世界大会が昨日、上海交通大学で開かれました。今年、京大 combat チームが、日本代表となり、さらにアジア地区予選でみごと 1 位となってこの世界大会に参加しました。この大会は、世界最大規模の計算機と情報処理関係の学会である ACM (Association for Computing Machinery) が主催する、大学生を対象とした国際プログラミングコンテストです。選手 3 名、コーチ 1 名で編成したチームに 1 台の計算機が与えられ、10 題の出題、制限時間 5 時間で解いた問題の数で順位が決められます。公用語は英語で、出題も質問もすべて英語で行われます。

第29回大会は、世界 71 ヶ国から 1,582 大学、4,109 チームが参加し、国内予選、地区予選を勝ち抜いて、78 チームが世界大会に参加しました。日本では 45 大学、200 チーム、京大からは 9 チームが参加し、京都大学と東京大学の各 1 チームが世界大会に出場しました。今朝、成績を確認しましたが、1 位は会場校の上海交通大学チームで 10 題中 8 題正解、京大 combat チームは、大健闘して 4 題正解、CalTech、

MIT, Seoul National University などと同じ29位の成績を収めました。

今日、この会場にいる新入生の皆さんも、自分たちで、あるいは先輩たちとチームを組んで、このようなコンテストに参加することを計画してみたいかがでしょうか。興味のある方は、大学院情報学研究科の湯浅太一教授(yuasa@kuis.kyoto-u.ac.jp)に連絡してください。

京都の街のことを一つ例として紹介しましょう。京都では、大学コンソーシアム京都という組織が活発に活動しています。そこでは、例えば、京都学生祭典が行われますが、その実行委員会のメンバーを今募集しています。ホームページを見て、京都駅の近くにあるキャンパスプラザで、今たびたび夕方開かれている説明会に参加してください。今年は新しく「京宴」という踊りがこの学生祭典のために創作されました。沖縄の人たちが使う四竹という、竹で作った鳴り物を採用した踊りです。皆さんもこれに踊りのチームをつくって参加してみたいかがでしょうか。

京都大学での研究のことを少し紹介しましょう。

例えば、京都大学にはたくさんの研究室がありますが、その中に「化学」という言葉の含まれる研究室がたくさんあります。例えば、量子化学、電子スピンの化学、表面化学、有機元素化学、結晶化学、無機合成化学、細胞生物化学、放射線生命化学、超伝導物質化学、微生物化学というように、ずいぶんたくさんあります。今日ご列席の名誉教授、藤永太郎先生は、『海と湖の化学』という560ページに上る本を監修され、3月25日に京都大学出版会から出されたところです。

化学は物質を扱う分野です。例えば、化粧品になる原料を見ていくと、ずいぶんと多様な分野から調達されていることがわかります。京都市の会社の例をあげましょう。伏見の日本酒として有名な月桂冠は、370年近い酒造りの歴史を持つ会社です。その総

合研究所では、化粧水や乳液など多くの化粧品を商品化して、自然派化粧品として宣伝しています。この関連の分野は、化学研究所や農学部などにおいて、醸造や微生物などをテーマとして研究します。

皆さんの中には20歳前の方がたくさんおられて、まだ日本酒を飲めない方が多いとは思いますが、肌の水分を保つために必要な成分を多く含むのは、実は日本酒であります。多種類のアミノ酸を含み、また有機酸、ビタミン、単糖類、ミネラルを多く含むのは、日本酒の中でも、純米酒と呼ばれるものであることが分かっているのですが、それをそのまま酒臭い化粧品として使うことはできません。そこで、さまざまな商品開発のための研究が行われ、化粧品としてようやく完成するのであります。

月桂冠株式会社の旧酒蔵に設置された「酒蔵バイオV I L (ベンチャービジネス・インキュベーション・ラボラトリー)」には、この3月末まで京都大学関連の研究室がいくつかありました。

科学の科というのはもともと分類することを表す字です。京都に山科という地名がありますが、科は品とも読めるのです。20世紀までに科学は果てしなく細分化されて発展してきました。

例えば保存科学という分野があります。文化財を次世代に伝えていくための手法を自然科学的に研究する分野です。文化財の素材、技法、修復、保存処理などを研究テーマにします。京都大学には総合博物館があり、展示室には皆さんもすでに入ってみたと思いますが、博物館の建物の中には展示室の他に、大きな収蔵庫があります。そこにはたくさんの貴重な資料が研究のために保存されています。

例えば、考古資料は、実物の資料だけで30万点を越します。国宝が1件あり、重要文化財は4件が含まれています。また、数千点の技術史の資料、歴大な自然科学の資料があります。京都大学全体では250万点にのぼる学術標本資料が保存されています。総合博物館では、それらを人類の財産として保存し、

学内外での教育と研究に活用する仕事を行っています。

国立民族学博物館の出している「民博通信」にも、森田恒之さんによって虫害の苦勞が紹介されています。大量の資料を持つ博物館では、その資料を虫の害から守らなければなりません。大規模収蔵庫の燻蒸による処理では、大気汚染につながるようなことになってはならないという問題があり、常に新しい虫害対策を研究しなければなりません。そこでは、虫を殺すという方法が必ずしも有効ではありません。例えば巨大な空間で燻蒸処理をすると、ガスがまんべんなく空間に行き渡る前に虫も必死になって逃げ出すのだそうです。また、ブータン国立図書館から、深刻な虫害に際して日本へ援助が求められたとき、虫害の処理の後に虫の死骸が見えてはいけないという厳しい条件が付いていたそうです。仏教国では政府が虫を殺してはいけないのだそうで、そこにも新しい保存科学の研究テーマがありました。

展示室を閉鎖せずに巨大なもの虫害対策をする、世界のあらゆる地域から次つぎと持ち込まれる資料に付いているさまざまな虫を処理する、環境に悪影響を与えない方法を見つけ出す、というようにして、多くの課題が保存科学という分野に与えられています。

多様な学問の分野を、あるいは21世紀のテーマであるそれらの融合を目指す分野を、よく見ていただきたいと思います。それぞれの分野の奥は深いのですが、その入り口が、京都大学に入学した皆さんの目の前にたくさんあるのです。どこからでも入ってみて、自分ももっとも関心を持った分野を見つけてください。今までの受験勉強では触れる機会がなかった学問分野がたくさんあることを、まず知ってほしいと思います。

私は今、京都大学にある研究分野をたくさん見えています。その経験から確信を持って言えることがあります。それはどの分野であっても、研究者は目を輝かせながら、熱中して、面白くてたまらないとい

いながら活動しているということです。そして研究者の話の聞くと、どの分野の話もとても面白いのです。さらに、大切なのは、どの分野も人類にとって役に立つ貴重な研究成果を生み出してきたということです。

皆さんは古都京都という世界遺産のある街で学習することになります。京都だけでなく近くには多くの平野や盆地や山地や水辺があって、それぞれの歴史を大切にしています。

京都大学には多くの先輩がいます。哲学者の西田幾多郎が歩いたと言われる哲学の道も有名です。ノーベル賞学者が散歩して、よいアイデアを得たという北白川扇状地のゆるやかな坂道があります。

和辻哲郎が『古寺巡礼』を出版したのは1919年（大正8年）ですが、1925年には京都帝国大学文学部倫理学講座に席を置きました。私も奈良や京都の古寺を訪ねるたびにこの『古寺巡礼』を読み返します。

京都という地名は隣接する近江や奈良などとともに世界に知られており、源氏物語が生まれた土地であり、最近では京都議定書が生まれた場所でもあります。

大学では、このように、さまざまな課題が果てしなく取り上げられて研究テーマとなり、その研究を進めるために、大学は必要な場所と人材と予算を求め、長い年月をかけて答えを出し、その成果を検証しつつ知識を蓄積し、その知識を社会に広める努力をします。

研究の課題には、何かに役立つ技術の開発だけではなく、知的興味からの発想もたくさんあり、人類の永遠の課題もあります。例えば、宇宙の構造はどうなっているのか、地球の中心にはどのような現象が起こっているのか、ひとの心とはどのようなものなのか、というように、たくさんの課題が皆さんの登場を待っています。その課題が皆さんの学習の場となり、皆さんの研究の場となります。これから皆さんが取り組む学習は、どのような分野でどのよう

な研究が行われてきたかを、まず知ることから始まります。大学の内外には膨大な知の蓄積があります。京都大学の教員や先輩の頭脳の中にある知財を受け継ぎ、次の段階へと発想を飛躍させ、新しい知の蓄積をもたらせる、皆さん方はそのような役割のもとに、今この場にいるのであります。

これからの熱意に満ちた学習と楽しい学園生活の充実を願って、皆さんの健康と意欲にあふれた学生生活を祈って、私のお祝いの言葉といたします。

京都大学入学おめでとうございます。

大学院入学式における総長のことば

平成17年4月7日

総長 尾池和夫

京都大学大学院に入学した修士課程2,240名、専門職学位課程230名、博士（後期）課程971名のみなさん、入学おめでとうございます。ご列席の名誉教授、副学長、研究科長、学舎長、教職員とともに、心からお喜び申し上げます。

皆さんはこれまで積み重ねてきた学問の道をさらに先へと進むために、あるいは方向転換して未知の領域へ一歩踏み出すために、いずれにしても新たな飛躍を求めて、大学院における研究の道を選択されました。その選択が実り多い人生へつながっていくことを祈って、入学をお祝い申し上げます。

大学院へ入学された今年、どのような年になるか、皆さんは研究や学習の計画を立てて、それぞれに想像しておられることと思います。国連は昨年、2005年を世界物理年として決議しました。日本でもそれを受けて、有馬朗人さんを委員長とする世界物理年日本委員会が発足しました。それに関連する行事もいろいろと計画されると思います。

100年前の1905年、3月にアインシュタインが「光子論」を発表し、光は粒子だと論じました。4月には「ブラウン運動」の論文を発表し、この論文で

アインシュタインは博士号を得ました。そして6月には「特殊相対性理論」を発表しました。アインシュタインは光電効果の法則の発見でノーベル賞を受けましたが、この研究は後の量子力学の土台となり、半導体材料での電子と光の振る舞いを制御する技術へと、やがてつながって行きました。このような物理学の100年にわたる歴史が、基礎研究の息の長い重要性を不動のものとして示しています。

今、日本の科学技術基本計画の第3期に向けての議論が大詰めに来ています。それに向けて多くの人々が意見を述べています。大学院で研究の道を選んだ皆さんも、この問題について考えてみてほしいと思います。

日本学術会議は、今年2月17日に、科学技術基本計画における重要課題に関する提言を出しました。提言はまず、科学技術基本計画の第3期においても、第1期から第2期に達成された割合で科学技術関係経費総額を増額していくことが必要である、として、また大学、研究機関等はその資金の効率的な運用に努めるべきある、としています。

また、基礎研究の割合を現状と同等以上に堅持し、科学研究費補助金を増加させることが必要である。研究者は政策に振り回されることなく、基礎研究に

取り組む自覚を持つべきである。第2期からの倍増を目標として競争的資金を拡充することが必要である。配分については、小型の研究、若手研究者を重視し、配分の適否を審査する仕組みを導入することが必要である。人文・社会科学領域においても競争的資金が活用できる措置を検討すべきである、というような重要な提言が並び、施設整備、人材育成、ポスドク制度や任期付任用制度の再設計、科学研究費補助金等への人件費組み入れ等について考慮しつつ、科学技術者育成・活用に関するグランドデザインを策定する必要がある、と述べています。これらの提言は、特に博士課程に入学して学問の道で職を得ようとする方々にとりわけ重要なことであります。

さて、その博士課程での研究課題ですが、京都大学で行われている研究のどの分野を見ても、私たちは実に面白いと感じます。それぞれの研究室で行われている研究の内容を聞くと、皆さんが目を輝かせながらその面白いと思うところを話してくれます。京都大学にいて、そのような研究の現場にいることの幸せを感じずにはられません。

最近の私の経験ですが、赤松明彦先生の楼蘭のミイラと古代インドという話を聞きました。これは時計台記念館で開催されたサロントークでのことです。副題に、インド学の最前線、とありました。研究の課題はいろいろありますが、私が興味を持ったのは、楼蘭のミイラは何語を話したか、という問いの設定でした。岩波文庫にあるヘディンの『さまよえる湖』には楼蘭のミイラの表情のことが出てきます。それには「力強い形の鼻で、自信にあふれた穏やかな微笑を浮かべた面差しは、高貴で品位のある印象を与えた」という風に書いてあります。楼蘭の美女と呼ばれるこの女性は、微笑を浮かべながら、どのような言葉を話したのでしょうか。

赤松先生は、インド古典学研究室の教授で、この研究分野の役割は、「過去のサンスクリット学の研究成果を継承しつつ、古代インドの言語、文学、哲

学、宗教、文化史等の研究を行い、その成果を発展させつつ、次世代に引き継ぐことにある」とのことです。

赤松先生の話にある楼蘭王国は、タクラマカン砂漠の東端に消えた王国です。砂漠には、そこに展開された歴史、古代都市と交易路、諸民族の文化の変容、砂漠の真ん中で今行われている壮大な科学技術実験、あるいは砂漠の生い立ちにかかわる大規模な活断層運動、砂漠の気候と水の収支、炭酸ガスの吸収を目的とする砂漠緑化のプロジェクトなど、実に多様な研究のネットワークが静かに展開されています。

宇治のキャンパスにある京都大学生存圏研究所は、国立大学法人となって、京都大学が独自に判断して設立した初めての研究所です。木質科学研究所と宇宙電波科学研究センターを統合し、再編して発足した研究所です。ここでは、人類の生存に必要な領域と空間を「生存圏」と呼び、その生存圏の診断をして現状と将来を把握し、さらにその治療と修復を行うという壮大な目的を持っています。

地球大気、木質遺伝子、木材などの研究から、環境を保全しつつ持続的に木質資源を活用するシステムを構築したいという目標があります。

宇宙太陽発電所、木質バイオマスの研究で、再生産可能なエネルギー変換利用による持続的な社会の構築をめざすという目標があります。生物資源の中でも再生産可能かつ生産量の多い木質資源に関する研究を進展させる研究を行います。また、宇宙空間を人類の新たな生活圏に拡大していく研究があります。

バイオマスという言葉は、生物資源という意味なのですが、それでもちょっとわかりにくい、聞きなれない言葉かもしれません。例えば、焚き火に使う薪などの木材資源がバイオマスです。天然ゴムやオリーブオイルなどもバイオマスです。要するに昔はエネルギー資源としては、木や草などのバイオマスしかなかったのですが、石炭、石油、天然ガスの発見から文明が発達し、バイオマスエネルギーは利用

されなくなってきました。

地下資源は枯渇しますが、日本は本来、森林という豊かなバイオマス資源を持っています。地球温暖化を防止するためには、炭酸ガスを固定し、砂漠の緑化を進め、海洋技術を進めるなど、幅広い分野での努力が必要であると思います。京都議定書の議論でも、炭酸ガス排出量の削減に重点が置かれる傾向がありますが、その吸収と固定の問題も同時に議論しなければならないでしょう。

一方で、すでに持っている技術を使って、風力発電、太陽光発電など、自然エネルギーによる電力を電力会社が買い入れる制度のできた国もあります。ドイツでは太陽光発電のブームで、日本のシャープや、京都の京セラなどのメーカーがヨーロッパでの販売に力を入れています。

京都大学には、生存圏研究所の他にも、研究の目的に環境という言葉を含む多くの組織があります。例えば、研究のための地球環境学堂と教育のための地球環境学舎を置き、研究と教育を支援する三才学林という組織を置いた大学院があります。ここでは、地球環境学の推進のために、厳密に見ると異なる活動であるところの教育と研究を、組織を工夫して効率よく行います。そして「天地人」三才の調和こそが、地球環境を維持する指針になるとの考えから、支援組織が三才学林と名付けられました。

また、人間・環境学研究科という大学院や生態学研究センターやフィールド科学教育研究センターという研究施設があります。

京都大学フィールド科学教育研究センターでは、全日空と環境教育で提携して、植林活動やエコツアーを計画しています。センターの持つ研究林などは自主企画で市民にも開放してきましたが、新しい企画では全日空からの支援を得て、海外でのウミガメ保護研究などへの貢献も視野において、京都大学と企業とが組織的に連携した環境保全活動を初めて実現するものです。また、このセンターでは、企業



との連携により、耐火性や耐震性に優れた木造建築を都市に導入することを目標とするなど、森里海連環学の創生に取り組んでいます。

一方で、地球を荒廃させる大きな原因の一つに戦争があります。戦争は地球の荒廃を招くばかりでなく、人の心までも激しく破壊します。大学は、地球環境の問題を単に自然科学の面から考えるのではなく、人類がたどってきた歴史を見つめ、ひとの心の問題を捉えながら、総合的に考えていかなければなりません。これからの世界では、多様に分化してきた学問の諸分野を総合し、融合して次の段階へと進めていくことが期待されています。総合大学の利点を活かして、大いに分野間の連携、大学と社会との連携、大学と市民との情報の共有による連携など、20世紀までにはなかった手法や形態による学問の進め方も考えていただきたいと思います。

大学院で、みなさんは新しい課題を見つけて学習し、研究成果をあげるということを、当然の目標とします。その中で、広い視野を持ち、社会の現実を見つめながら、国際的に活躍する人材であることを、常に心がけてほしいと思います。京都大学での皆さんの学習と研究が、やがて大きく実り、歴史に残る成果につながることを祈って、あるいは、皆さんが世界を舞台として活躍される人材となることを祈って、私のお祝いの言葉といたします。

入学おめでとうございます。

大学の動き

平成17年度学部入学式

平成17年度学部入学式が、4月7日(木)午前10時より、沢田敏男元総長、長尾 真前総長、名誉教授はじめ各部局長等の出席のもとに、本学総合体育館にて挙行された。

京都大学交響楽団による式典曲奏楽、京都大学合唱団による学歌斉唱に続き、「総長のことば」があり、午前10時30分に終了した。

今年度の新入生数は、次のとおりである。

学部	入試区分 一般入試 (前期)	一般入試 (後期)	外国学校 出身者選抜	外国人留 学生特別選抜	編入学	再入学	学士入学	総計
総合人間学部	105人	17人	-人	1人	-人	-人	-人	123人
文学部	192	32	-	1	-	-	3	228
教育学部	43	21	-	-	10	-	-	74
法学部	303	25	5	-	7	-	-	340
経済学部	208	30	9	8	12	-	-	267
理学部	280	31	-	1	-	-	-	312
医学部	212	35	-	-	-	1	-	248
薬学部	74	11	-	1	-	-	-	86
工学部	860	98	-	18	18	-	2	996
農学部	240	75	-	3	-	-	-	318
総計	2,517	375	14	33	47	1	5	2,992



平成17年度大学院入学式

平成17年度大学院入学式が、4月7日（木）午後3時より、名誉教授はじめ各研究科長等の出席のもとに、本学総合体育館にて挙行された。

京都大学交響楽団による式典曲演奏、京都大学合

唱団による学歌斉唱に続き、「総長のことば」があり、午後3時30分に終了した。

今年度の新入生数は、次のとおりである。

区分 研究科	修士課程				合計
	入学者	外国人留学生		再入学者	
		国費	私費		
文学研究科	98 ^人	6 ^人	4 ^人	— ^人	108 ^人
教育学研究科	42	—	2	—	44
法学研究科	32	3	8	—	43
経済学研究科	48	8	21	—	77
理学研究科	307	4	1	—	312
医学研究科	12	—	2	—	14
薬学研究科	79	—	2	—	81
工学研究科	663	6	24	—	693
農学研究科	281	3	6	—	290
人間・環境学研究科	144	4	13	—	161
エネルギー科学研究科	125	—	3	—	128
情報学研究科	178	4	7	—	189
生命科学研究科	74	—	—	—	74
地球環境学舎	26	—	—	—	26
合計	2,109	38	93	0	2,240

区分 研究科	博士後期課程											合計	
	編入学	外国人留学生		再入学	外国人留学生		転入学	小計	進学者	外国人留学生			小計
		国費	私費		国費	私費				国費	私費		
文学研究科	5 ^人	3 ^人	2 ^人	— ^人	— ^人	— ^人	— ^人	10 ^人	41 ^人	1 ^人	2 ^人	44 ^人	54 ^人
教育学研究科	6	—	—	—	—	—	—	6	24	1	3	28	34
法学研究科	2	—	—	—	—	1	—	3	10	2	6	18	21
経済学研究科	6	4	—	—	—	—	—	10	28	2	7	37	47
理学研究科	24	4	2	—	—	—	—	30	126	2	1	129	159
医学研究科	11	2	1	1	—	—	—	15	14	—	—	14	29
薬学研究科	10	—	—	—	—	—	—	10	25	1	—	26	36
工学研究科	48	2	7	—	—	—	—	57	57	1	6	64	121
農学研究科	16	9	6	—	—	—	—	31	58	2	6	66	97
人間・環境学研究科	10	3	—	—	—	—	—	13	59	2	6	67	80
エネルギー科学研究科	3	—	—	—	—	—	—	3	13	—	1	14	17
情報学研究科	23	1	1	—	—	—	—	25	31	2	—	33	58
生命科学研究科	5	—	—	—	—	—	—	5	30	—	—	30	35
地球環境学舎	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	1	2	3
合計	169	29	19	1	0	1	0	219	517	16	39	572	791

区分 研究科	専門職学位課程			合計
	入学者	外国人留学生 国費	私費	
法学研究科	203 ^人	- ^人	- ^人	203 ^人
医学研究科	26	-	1	27
合計	229	0	1	230

区分 研究科	博士課程				
	入学者	外国人留学生 国費	私費	転入学者	合計
医学研究科	133 ^人	5 ^人	5 ^人	0 ^人	143 ^人

区分 研究科	一貫制博士課程								
	入学者	外国人留学生 国費	私費	小計	編入学者	外国人留学生 国費	私費	小計	合計
アジア・アフリカ 地域研究研究科	26 ^人	4 ^人	0 ^人	30 ^人	0 ^人	0 ^人	0 ^人	0 ^人	30 ^人

区分 研究科(学舎)	博士課程								
	編入学者	外国人留学生 国費	私費	小計	進学者	外国人留学生 国費	私費	小計	合計
地球環境学舎	0 ^人	0 ^人	1 ^人	1 ^人	6 ^人	0 ^人	0 ^人	6 ^人	7 ^人



平成17年度入学者選抜学力試験の結果

平成17年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の前期日程試験は2月25日（金）・26日（土）及び27日（日）に、後期日程試験は3月13日（日）・14日（月）に実施した。学部別の受験者数、合格者数及び入学者数等は次のとおりである。

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	倍 率 (B/A)	第1段階 選抜合格者数	(C) 受験者数	倍 率 (C/A)	欠席者数	欠席率	合格者数	辞退者数	追加合 格者数	入学者数
総合人間学部	120人											
前期												
文系	55	209	3.8	203	203	3.7	—	0.0	55	—	—	122
理系	50	153	3.1	151	148	3.0	3	2.0	50			
後期	15	248	16.5	240	154	10.3	86	35.8	17			
文 学 部	220											
前期	190	562	3.0	562	555	2.9	7	1.2	193	1	—	224
後期	30	449	15.0	303	145	4.8	158	52.1	32			
教 育 学 部	60											
前期	40	150	3.8	150	144	3.6	6	4.0	43	—	—	64
後期	20	211	10.6	150	82	4.1	68	45.3	21			
法 学 部	310											
前期	300	922	3.1	922	909	3.0	13	1.4	304	1	—	328
後期	10	363	36.3	287	102	10.2	185	64.5	25			
経 済 学 部	230											
前期												
一般	160	525	3.3	524	515	3.2	9	1.7	161	3	—	238
論文	50	251	5.0	250	243	4.9	7	2.8	50			
後期	20	792	39.6	587	344	17.2	243	41.4	30			
理 学 部	311											
前期	280	833	3.0	811	792	2.8	19	2.3	280	1	1	311
後期	31	889	28.7	875	548	17.7	327	37.4	31			
医 学 部	243											
前期	213	605	2.8	559	549	2.6	10	1.8	219	12	1	247
後期	30	365	12.2	307	171	5.7	136	44.3	39			
薬 学 部	80											
前期	70	222	3.2	222	210	3.0	12	5.4	74	—	—	85
後期	10	151	15.1	151	98	9.8	53	35.1	11			
工 学 部	955											
前期	857	2,166	2.5	2,166	2,133	2.5	33	1.5	861	2	—	958
後期	98	923	9.4	828	377	3.8	451	54.5	99			
農 学 部	300											
前期	233	590	2.5	590	579	2.5	11	1.9	244	4	—	315
後期	67	703	10.5	703	452	6.7	251	35.7	75			
小 計												
前期	2,498	7,188	2.9	7,110	6,980	2.8	130	1.8	2,534			
後期	331	5,094	15.4	4,431	2,473	7.5	1,958	44.2	380			
計	2,829	12,282	4.3	11,541	9,453	3.3	2,088	18.1	2,914	24	2	2,892

(注) 受験者数・欠席率は最終教科のものである。

[外国学校出身者のための選考の実施結果 (外数)]

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	倍 率 (B/A)	第1次 選考合格者数	(C) 受験者数	倍 率 (C/A)	欠席者数	欠席率	合格者数	辞退者数	入学者数
法 学 部	20以内 ^人	32 ^人	1.6	20 ^人	16 ^人	0.8	4 ^人	20.0%	5 ^人	— ^人	5 ^人
経 済 学 部	10以内	33	3.3	21	17	1.7	4	19.0	9	—	9

名誉教授称号授与式

4月5日(月)午前11時から名誉教授称号授与式が、時計台記念館において挙行された。

授与式は、副学長、部局長等の出席のもとに行われ、称号授与のあと「総長あいさつ」があり、午前11時45分終了した。

称号を授与された方は、次の63名である。



(氏名)	(推薦部局)	(氏名)	(推薦部局)
北 畠 能 房	(人間・環境学研究科)	英 保 茂	(情報学研究科)
柳 田 充 弘	(生命科学研究所)	中 村 榮太郎	(高等教育研究開発推進センター)
伊 藤 操 子	(農学研究科)	笠 原 三紀夫	(エネルギー科学研究科)
杉 原 高 嶺	(法学研究科)	大久保 捷 敏	(エネルギー理工学研究所)
佐々木 丞 平	(文学研究科)	中 西 重 忠	(生命科学研究所)
加 藤 暢 夫	(農学研究科)	藤 本 孝 孝	(工学研究科)
泉 井 桂	(生命科学研究所)	石 川 光 庸	(人間・環境学研究科)
野 木 達 夫	(情報学研究科)	竹 内 洋 洋	(教育学研究科)
小 林 四 郎	(工学研究科)	池 田 篤 治	(農学研究科)
島 田 幹 夫	(生存圏研究所)	大 見 哲 巨	(理学研究科)
石 井 隆 次	(エネルギー科学研究科)	本 庶 佑 佑	(医学研究科)
高 月 紘 紘	(環境保全センター)	植 田 洋 匡	(防災研究所)
庄 武 孝 義	(霊長類研究所)	西 田 孝 明	(理学研究科)
江 原 武 一	(教育学研究科)	内 山 勝 利	(文学研究科)
林 勇 夫 夫	(農学研究科)	杉 浦 幸 雄	(化学研究所)
小 野 紘 一	(工学研究科)	片 山 徹 徹	(情報学研究科)
寺 尾 武 彦	(理学研究科)	東 山 紘 久	(教育学研究科)
安 井 邦 夫	(人間・環境学研究科)	橋 本 竹 治	(工学研究科)
川 瀬 洋 一	(原子炉実験所)	田 中 成 明	(法学研究科)
菊 澤 喜 八郎	(農学研究科)	佐 藤 忠 信	(防災研究所)
井 上 和 也	(防災研究所)	松 島 征 征	(高等教育研究開発推進センター)
辻 井 博 博	(農学研究科)	高 橋 強 強	(農学研究科)
池 田 善 郎	(農学研究科)	小 南 一 郎	(人文科学研究所)
寶 月 誠 誠	(文学研究科)	田 中 紘 一	(医学研究科)
山 中 康 裕	(教育学研究科)	渡 邊 英 一	(工学研究科)
飯 田 恭 敬	(工学研究科)	前 川 和 也	(人文科学研究所)
廣 瀬 正 明	(農学研究科)	松 田 哲 哲	(理学研究科)
田 口 貞 善	(人間・環境学研究科)	赤 岡 功 功	(経済学研究科)
川 寄 敏 祐	(薬学研究科)	玉 尾 皓 平	(化学研究所)
井 出 千 束	(医学研究科)	加 藤 剛 剛	(アジア・アフリカ地域研究研究科)
片 桐 晃 晃	(人間・環境学研究科)	白 石 隆 隆	(東南アジア研究所)
吉 川 恒 夫	(工学研究科)		